

冬の足音

木枯らし 号 ツグミの渡り

山々を鮮やかに彩る紅葉の冴えが最高潮に達した一瞬を突いて木枯らしがミソレ混じりの雪とともに襲来して、初冬のモノクロムとの斑の世界に塗り替えてしまう。すでに上越国境の山々の頂は雪化粧となり、裾野に広がる紅葉とコントラストをみせている。十一月の声を聞くとともに北国の平地でも雪が降りいよいよ冬が山から里へ降り、晩秋の寒さから初冬の寒さに階段を一段降りてしまった。

この季節、寒波に乗って渡り鳥がシベリヤから次々と飛来してきているが、ツグミの大群に収穫前のブドウの実をしたたか食害されて困った、との話が北海道仁木町でワイン作りをしている飯田清悦郎氏のエッセイの中に書かれている。食害防止に万策尽きた飯田さんはついにシベリヤ上空にその冬初めての大雪波が現れると、ほぼ五日目にツグミの大群がやってくる」という『ツグミ襲来の法則』という予測法を発見して、ツグミの襲来前に収穫を終え、食害を防ぐことに成功したという。

シベリヤのツグミの群れは寒気団で冬の到来を感じ、その寒気団が偏西風の蛇行に乗ってが日本列島に南下し、木枯らしを追い風にして効率よく日本へ飛来できることを本能的に知っていたのだろう。

十月中頃はアネハツルのヒマラヤ越えの季節でもある。冬を迎える直前のモンソン明けの穏やかな時をとらえて、七千^足級のヒマラヤの峰々を、^足気に越えて渡る。ツグミもアネハツルの群れも微妙な天気の変化のタイミングを本能的に察知して厳しい渡りを乗り越えてくるのだろう。

明日の七日は暦のうえで立冬。東京での木枯らし 号が吹く平年の日であり、新潟での初雪の最も早い日でもある。いよいよ冬の足音もそこまできており、小春日和を捕らえて「雪迎え」の冬支度を急がねばならない。